HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの貧困の経験［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	大澤, 真平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7161号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87125
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	OSAWA_Shinpei_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：大澤真平

主査 教　授　松本伊智朗
審査委員　副査 准教授　鳥山まどか
副査 准教授　辻　智子
副査 准教授　佐々木　宏（広島大学大学院人間社会科学研究科）
副査 准教授　丸山　里美（京都大学大学院文学研究科）

学位論文題名
子どもの貧困の経験

本論文の目的は、子どもの貧困の経験とその帰結を示すことである。そのために①子どもの視点から見た貧困の生活と認識を明らかにすること、②子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンス実現の実際を示すことの二つの課題が設定される。序章では本研究の主題である「子どもの貧困経験」という視点について、第１章では本研究の基礎概念である「資源の欠如・不足としての貧困」について、それぞれ先行研究の検討と本研究の理論的な立場が示される。第２章では、量的調査から家族の持つ資源と子どもの生活の関係が検討される。第３章から第５章にかけて、継続的なインタビュー調査に基づいて、子どもの貧困の経験の内実、若者期との接続が明らかにされる。終章では、得られた知見の理論的、政策的意味について検討がなされる。

本論文の評価しうる点は以下である。まず理論的、方法的枠組みに関する諸点である。第1 に、「貧困の経験」に着目する分析視角である。本研究は方法論的には、構造と主体の相互関係を念頭に置き、主体の側からの貧困の意味を理解する研究の一環に位置づく。これを実証的に検討するために、「貧困の経験」に着目する。資源の制約下での日常生活における選択肢の制約、具体的な選択と決定とその評価、意味理解を「貧困の経験」として捉え、これを主体の側から貧困を考察する手がかりとしている。この方法的視角のユニークさは高く評価される。これまでも主体の側から貧困を理解する必要は指摘されてきたものの、これを「経験」の観点から子どもに即して実証的に検討した例は、日本の研究ではほとんどない。第２に、貧困を資源の不足・欠如として定義する際、資源を物的・経済的資源を基底におきながら、公共の社会的資源、個人的資源等の多様な側面で構成していることである。この点は貧困の定義に関する理論的動向を踏まえていると同時に、「資源の制約下での個人の選択」

としての「貧困の経験」の理解の幅を広げ、リアリティを与えている。第3に、子ども期と若者期の連続性をライフコース視点で把握している点である。これによって、貧困の世代的再生産の社会的過程を、原家族の貧困の直線的な結果としてではなく、子ども期から若者期にかけての不利の累積の過程として分析することが可能になっている。第4に、こうした理論的、方法的枠組みがこれまでの先行研究に明確に位置付けられ、かつ本研究に一貫して貫かれていることである。

次に調査設計に関わる諸点である。第1に、本研究の分析の中心になっているインタビュー調査が、8年間にわたって継続的に実施されている点である。8年間の間に捕捉できなくなったインタビュー対象者が存在するので、8年間の状況が分析しうる形で把握できた対象者は限定される。しかし継続的なインタビューデータを分析し得たことで、ライフコース視点の分析がより豊かなものになった。第2に、大量アンケート調査による分析があわせて行われ、多角的な実証手続きが取られている点である。

最後に、得られた知見の理論的、政策的含意に関する諸点である。本研究は「貧困の経験」の分析を通して、主体としての子どもの側から貧困を理解しようとする。こうした分析視角は貧困問題を「主体のあり方」の問題に収れんさせてしまう危険を内包するが、本研究では「貧困の経験」を形成する具体的な資源の制約をあわせて分析することで、構造の問題としての貧困理解を深めている。この点は単に構造と主体の関係の分析にとどまらず、主体の側から構造を問うという実践的な性格を本研究に与えていると同時に、経済的問題の枠外で貧困対策の議論が行われがちな日本の政策的文脈に対する批判となっている。また本研究は、貧困の世代的再生産の過程を子ども期から若者期にかけての日常的な制約の経験の蓄積の観点から分析し、日々の生活と選択を支える資源の重要性を指摘する。この点は、子どもの「いま」ではなく「将来」に焦点化されがちな「子どもの貧困」に関するこれまでの研究と政策的議論に対する批判として重要な意味を持つ。

審査の過程で指摘された課題は、主に以下の2点である。いずれも継続的なインタビュー調査に基づく第3章から第5章にかけての叙述と分析の方法に関わる。第1に、章ごとの生活史の叙述に濃淡がみられることである。貧困の経験を資源の制約下での個人の選択と決定、評価という側面から描いていく際、個人の選択や決定、評価の背景にある生活史の理解が重要である。この点の叙述にやや不足がみられた。第2に、ジェンダー視点による分析と叙述の不十分さである。第5章ではジェンダー視点からの分析がなされているが、第3章、第4章ではその点が必ずしも明確ではない。また8年間にわたる継続的なインタビューで最後まで調査可能であったのは女性のみであったが、この点のジェンダー視点からの考察と叙述がより丁寧になされると、全体的な説得力が増すと考えられる。

こうした課題がありながらも、上述の学術的貢献が認められることから、本論文は先行する当該分野の研究の発展に大きく資すると高く評価される。よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

以上